

# ジョン・ドス・パソスの U.S.A. の総序「U・S・A」読解

広瀬 英 一

John Dos Passos (1896—1970) の U. S. A. は、*The 42nd Parallel* (1930), 1919 (1932), *The Big Money* (1936) と出て出た三つの作品を、わずかな改訂をして三部作とし、一九三八年一月に出版されたものである。その際につけられた序文が「U・S・A」で、これが第三部の *The Big Money* にあづけていっていたヒローク「Yag」とあづけて U. S. A. 全体の象徴的な始めと終りになっている。<sup>⑨</sup>

「U・S・A」は、シンタックスの面でもやろしくはないが、これをいっそうむつかしくしているのは、レトリカルな文章を支えている、平面的に広がる遠心的、拡散的想像力で、こういう文章を論理的にたどることは、時には不可能のように思える。

しかし、このプロローグの重要さを考えれば、これを筋道をたてて読むには、U. S. A. 三部作の理解に必要なことなので、小論では、このプロローグの読解を試みる。

U. S. A.

The young man walks fast by himself through the crowd that thins into the night streets; feet are tired from hours of walking; eyes greedy for warm curve of faces, answering flicker of eyes, the set of a head, the lift of a shoulder, the way hands spread and clench; blood tingles with wants; mind is a beehive of hopes buzzing and stinging; muscles ache for the

knowledge of jobs, for the roadmender's pick and shovel work, the fisherman's knack with a hook when he hauls on the slithering net from the rail of the lurching trawler, the swing of the bridgeman's arm as he slings down the white-hot rivet, the engineer's slow grip wise on the throttle, the dirtfarmer's use of his whole body when, whoaing the mules, he yanks the plow from the furrow. The young man walks by himself searching through the crowd with greedy eyes, greedy ears tant to hear, by himself, alone.

The streets are empty. People have packed into subways, climbed into streetcars and buses; in the stations they've scampered for suburban trains; they've filtered into lodgings and tenements, gone up in elevators into apartmenthouses. In a showwindow two shallow windowdressers in their shirtsleeves are bringing out a dummy girl in a red evening dress, at a corner welders in masks lean into sheets of blue flame repairing a cartrack, a few drunk bums shamble along, a sad streetwalker fidgets under an archlight. From the river comes the deep rumbling whistle of a

steamboat leaving dock. A tug hoots far away.

The young man walks by himself, fast but not fast enough, far but not far enough (faces slide out of sight, talk trails into tattered scraps, footsteps tap fainter in alleys); he must catch the last subway, the streetcar, the bus, run up the gangplanks of all the steamboats, register at all the hotels, work in the cities, answer the wantads, learn the trades, take up the jobs, live in all the boardinghouses, sleep in all the beds. One bed is not enough, one job is not enough, one life is not enough. At night, head swimming with wants, he walks by himself alone.

No job, no woman, no house, no city.

Only the cars busy to catch the speech are not alone; the cars are caught tight, linked tight by the tendrils of phrased words, the turn of a joke, the singsong fade of a story, the gruff fall of a sentence; linking tendrils of speech twine through the city blocks, spread over pavements, grow out along broad parked avenues, speed with the trucks leaving on their long night runs over roaring highways, whisper

down sandy byroads past wornout farms, joining up cities and fillingstations, roundhouses, steamboats, planes groping along airways; words call out on mountain pastures, drift slow down rivers widening to the sea and the hushed beaches.

It was not in the long walks through jostling crowds at night that he was less alone, or in the training camp at Allentown, or in the day on the docks at Seattle, or in the empty reek of Washington City hot boyhood summer nights, or in the meal on Market Street, or in the swim off the red rocks at San Diego, or in the bed full of fleas in New Orleans, or in the cold razorwind off the lake, or in the gray faces trembling in the grind of gears in the street under Michigan Avenue, or in the smokers of limited express trains, or walking across country, or riding up the dry mountain canyons, or the night without a sleepingbag among frozen beartracks in the Yellowstone, or canoeing Sundays on the Quinnipiac; but in his mother's words telling about longago, in his father's telling about when I was a boy, in the

kidding stories of uncles, in the lies the kids told at school, the hired man's yarns, the tall tales the doughboys told after taps;

it was the speech that clung to the ears, the link that tingled in the blood; U. S. A.

U. S. A. is the slice of a continent. U. S. A. is a group of holding companies, some aggregations of trade unions, a set of laws bound in calf, a radio network, a chain of moving picture theatres, a column of stockquotations rubbed out and written in by a Western Union boy on a blackboard, a publiclibrary full of old newspapers and dogeared historybooks with protests scrawled on the margins in pencil. U. S. A. is the world's greatest rivervalley fringed with mountains and hills. U. S. A. is a set of bigmouthed officials with too many bankaccounts. U. S. A. is a lot of men buried in their uniforms in Arlington Cemetery. U. S. A. is the letters at the end of an address when you are away from home. But mostly U. S. A. is the speech of the people. ⑧

U. S. A. is the speech of the people.  
 米界はつゝべゝ夜の街路にまぎれひなつていふ人々の

群れの中を足早やに歩いていく。足は何時間も歩いて疲れている。目は人々の顔の暖かなふくらみの線を、応えてくれる目のまたたきを、頭のかっこうと、肩の上がりようを、手が開き握りしめられるさまを、どん欲に求めている。血は渴望でたぎり、心はぶんぶん唸り刺すもろもろの希望の巢である。筋肉は、さまざまな仕事を知りたくてうずうずしている。道路工夫のつるはしとシャベルの仕事、漁民が揺れるトロール船の手すりから、ずるずるすべる網を引き上げる時の鉤の扱いのコツを、架橋工夫が白熱したリベットを投げおろす時の腕の振り方を、機関士のゆっくりした絞リ弁の握り方を、農民がらばにかけ声をかけて鋤を畦から引き上げる時の全身の使い方を。若者は人々の群れの中を、どん欲な目をみはり、どん欲に聞き耳をたて、ひとり、ただひとり、探し求めて歩いていく。

街には人気がない。人々は地下鉄にすし詰めになり、市電やバスに乗り込んでしまった。駅では人々は郊外電車に乗ろうと走り、下宿や借家にそれぞれ帰り、エレベーターでアパートの部屋に上っていった。ある店のショー・ウィンドーでは、二人の土色の顔をした飾りつけ屋がシャツだけになって、赤いイブニング・ドレスを着せ

たマネキン人形を外に出している。街角では、マスクをかぶった熔接工が青い火花の幕の中にかがみこんで電車の線路を修繕している。数人の酔っぱらった浮浪者がよろよろ歩き、悲しげな売春婦がアークライトの街灯の下でそわそわしている。河の方からは、波止場を離れる汽船の深い低い汽笛が聞こえてくる。曳船がずっと遠くで警笛を鳴らしている。

若者はひとり足早やに、しかし十分早くではなく、遠くへ、しかし十分遠くへではなく、歩いていく(人々の顔はすべるように消えて見えなくなり、話し声はうすれて声のはしばしになり、足音は横町をかすかになっていく)。かれは最終の地下鉄、市電、バスに乗らねばならぬ。すべての汽船の渡り板を走り上がり、すべてのホテルに部屋をとり、いろんな都市で働き、求人広告に応募し、いろんな職業をおぼえ、いろんな仕事につき、すべての下宿屋に住み、すべてのベッドで眠らねばならぬ。ひとつのベッドでは十分でなく、ひとつの仕事では十分でなく、ひとつの生活では十分でない。夜、頭は渴望であふれつつ、かれはただひとり歩いていく。

仕事もなく、女もなく、家もなく、町もない。ただ、言葉をとらえようといっしょうけんめいの耳だ

けがひとりではない。耳は、言われた言葉のつるに、冗談の言いまわしに、抑揚のない物語の終りに、ぶっきらぼうな文章の切り方に、しっかりとえられ、結びついている。結びつける言葉のつるは、都会の街角を通過して巻きつき、舗道の上を広がり、公園のある幅の広い通りを伸び、唸るハイウェイを、長い夜の旅に出るトラックとともに走り、舗装してないわき道の古い農家のそばを囁くように通り、都市、給油所、円形機関車庫、汽船、空路を手さぐりするように進む飛行機、をつなぐ。言葉が、山の牧場で大声で叫ばれ、広くなって海や静まった浜辺に達する河をゆっくりと漂い流れる。

夜混み合う人々の群れの中を長時間歩いた時も、かれはやはり孤独であった。アレントタウンの軍事訓練キャンプにいる時も、シアトルの波止場の昼も、少年の日の暑い夏の夜ワシントン市のうつろな悪臭の中でも、マーケット・ストリートでの食事の時も、サンディエゴの赤い岩の沖で泳ぐ時も、ニュー・オーリーonzの蚤だらけのベッドの中でも、潮から吹いてくる冷たい身を切るような風に吹かれている時も、ミシガン・アベニューの下の通りで、ギヤの軋る音の中でふるえている灰色の顔の人々の中にいる時も、特急列車の喫煙室の中でも、国中を

歩きまわる時も、乾燥した山地の峡谷を車で上がる時も、イエローストーンの凍りついた熊の通う道での寝袋なしの夜も、クイニピアック河でカヌーを漕いだ日曜日にも、やはり孤独であった。

しかし、かれの母親が昔を語る言葉の中に、かれの父親が、わたしの子供の頃に、と語る話に、おじさんたちの冗談話に、こどもたちが学校で話す嘘っぱちに、使用人のほら話に、歩兵たちが消灯ラッパの後でひろげる大ぶろしきに、かれはそれほど孤独を感じなかった。

それは耳について離れぬ言葉、血の中にさわぐつながり、つまりU・S・Aであった。

U・S・Aはひとつの大陸である。U・S・Aは親会社の集団であり、労働組合の集合体であり、子牛皮で装丁された法律全集であり、ラジオのネットワークであり、映画館の連鎖であり、ウェスタン・ユニオンの職員が黒板に消しては書き込む株の相場表であり、古い新聞と、えんぴつで余白に抗議の言葉をなぐり書きした、端の折れたページのある歴史書のいっぱいある公立図書館である。U・S・Aは、山と丘に縁どられた世界最大の谷間、U・S・Aは、銀行預金を持ちすぎているおしゃべりの官僚の集団である。U・S・Aは、制服のままで

アーリントン墓地に埋葬された多くの人である。U・S・Aは、きみが故郷を離れた時、宛名の最後に書く文字である。しかし、主として、U・S・Aは、人々の言葉なのだ。<sup>⑧</sup>

以上のプロローグ全文を、九つのパラグラフに分ける。

第一のパラグラフ冒頭の「若者がひとり、夜の街路にまばらになっていく人々の群れの中を足早に歩いていく」という文は、この「U・S・A」のもっとも重要な文章であり、また三部作 U・S・A. の基調となる放浪のテーマをうちだしたものである。若者がひとり探し求めて歩く、という文は、この第一節をしめくくる時にくり返され、第三節の始めと終りにまたあらわれる。

この書き出しに続いて、この若者が全身にたぎらせて歩くその渴望の対象が、若者の目、血、心、筋肉の求めるものとして、たたみかけて十余行の接続詞のないひとつの文章で列挙される。ドス・パソスによくみられる cataloging である。注目すべきは、「筋肉は、さまざまな仕事を知りたくてうずうずしている」という文に続く、多様で具体的な肉体労働者の仕事の内容である。若者のにえたる渴望は、このように多様な仕事について肉体を動かす中ではじ

めて満たされるものなのである。

第二節は、若者の目にうつる街の風景である。ここで描かれる人間は、ねずみのように走りまわってそれぞれ粗末なねぐらに入り込み(“pack”, “scamper”, “flier”)という動詞は、いずれも、人間を卑小に見せる)、人気のない街に残っている人たちといえ、赤いイブニング・ドレスを着せたマネキン人形を持ち出している飾りつけ屋、青い火花の中にのめり込む熔接工、酔っぱらった浮浪人、客を見つけていないアーク灯の下の売春婦、とうつろでわびしい。河から聞こえてくる船の汽笛も、夜の街のわびしさ、闇の深さを増すばかりである。マネキン人形(“dummy girl”)も含めて、ここにてでくる人間のうら悲しさ、それに、色をあらわす言葉(“sallow”, “red”, “blue”, “archlight”)や音をあらわす言葉(“deep rumbling whistle”, “hoot”)によって喚起される都会の夜のイメージの鮮烈さ、これらはいずれもドス・パソスに特徴的なものである。

第三節は、また足早に歩く若者にかえる。ここでもやはり若者はあふれんばかりの渴望にもえているが、それは第一節よりいっそう包括的に述べられる。「すべての」(“all”)何かでなくてはならず、「ひとつの」(“one”)ノッド、仕事、生活では十分ではない、という抽象的表現

は、ありとあらゆることを経験しつくしたい、という若者の欲望をあらわしている。そのためには、かれの歩みは、足早ではあっても、十分早いとは言えず、遠くまで歩いても、十分遠くまで歩いたとは言えないわけである。

第四節は、ただの一行、「仕事もなく、女もなく、家もなく、町もない」で、これは、若者が定着するための紐帯を持たないことを示している。(この U. S. A. 三部作の「物語」部分に登場する十二人の主要人物は、アメリカはもちろんヨーロッパ諸国、カナダ、メキシコなどを放浪していて、かれらをつなぎとめる紐帯はないか、ある場合も、ほとんど切れてしまっているかである。ただし、かれらの場合、この紐帯のない点は同じだが、この若者のように探し求めているのではなく、ある状況から逃げだし、押し流されて次の状況にぶつつかり、という放浪で、かれらのそれぞれの意志、性向、信条をはるかに越える大状況がかれらを動かしているように描かれている。)

第五節からは、このプロローグ「U・S・A」、そして U. S. A. 全体を通じて、作家ドス・パソスの課題である、人々の言葉をとらえることへの若者の意欲が述べられる。

「ただ、言葉をとらえようとしていっしょうけんめいの耳だけがひとりではない」という書き出しは、これまで描

かれてきた孤独な若者にあって、対照的に耳だけが例外で、つながるものを持ちうることを示す。この耳がつながっているものが言葉であり、それは、この「U・S・A」の最後の文が述べるように、「人々の言葉」、すなわち、U・S・A である、とこの U. S. A. 全体の中心的テーマになっていく。

言葉にはつるがあってそれが耳にしっかり結びつく。また、言葉のつるは、からまり(“twine”)、広がり(“spread”)、伸び(“grow out”)、疾走(“speed”)、囁き通(“whisper”)というように運動のイメージを持つ動詞によって、あらゆるところへ伸び、あらゆるものをつなぐ。この若者を中心に考えれば、若者と、かれを取り巻く社会をつなぐものは言葉である、ということになる。最後の、山で叫ばれた言葉が河を下って海に至る、という文は、言葉のつるの伸び方、言葉の伝わり方に水路もある、ということを表現したものであろう。

第六節は、若者のアメリカ大陸各地でのいっさいの体験において、夜ひとり歩く時と同様孤独であった、と述べられる。ここに列挙されている、時、場所、経験は、次の節の内容と同様に、作者ドス・パソス自身のものと考えられる。

第七節の、母の昔話をする言葉や父のこどもの頃の話、

おじの冗談、こどものつく嘘、使用人のほら話、歩兵の大ぶろしきにはそれほど孤独を感じなかった、ということから、言葉というものが、この若者と他者を結びつける役割を果たしていたことがいっそうはつきりしてくる。

第八節で、「それは耳について離れぬ言葉、血の中にさわぐつながり、つまりU・S・Aであった」と断定される。この、孤独を感じさせなかった、おもに幼時の親しい人々の言葉、話が、すなわち、U・S・Aであった、とはどう考えたらいいのか。

この第六節、七節、八節の三つの節はセミコロンでつながれたひとつの文で、段落は分けてあっても、文の終止は第八節の末尾である。これら三節は、このプロローグの中で過去形で書かれている部分で、ドス・パソスは、明らかにかれ自身の幼い時からの経験を想いだしている。

ドス・パソスにおける“memory”の重要性については、すでにジョン・H・レンの指摘<sup>⑨</sup>があるが、後述することとの関連でここでふれておきたいのは、これらの過去が、たとえば続くしめくくりの第九節における現在を、現在到達した結論——「U・S・Aは人々の言葉なのだ」——を導く出発点になっていることである。

このプロローグ「U・S・A」の若者は、夜の街をひと

り足早やに歩いている。かれの探しているものは「人々の言葉」である。かれの、この言葉を求めている現在の放浪のきっかけは、過去において、親しい人々の言葉を聞いていた時には孤独を感じなかったからである。すなわち、言葉こそ血縁だった、という記憶が現在のかれを動かしているのである。

第九節では、U・S・Aは大陸のひとつであり、親会社の集まりであり、労働組合の集合体であり、法律全集であり、と次々に列挙される。ここに列挙されたものは、網羅的ではなく、限られた範囲のもので、ドス・パソスの関心のありようを示すものである。

そして、「しかし、主として、U・S・Aは、人々の言葉なのだ」と結ばれるわけだが、これを理解するためには、ドス・パソスが *Three Soldiers* (1921) のモダン・ライブラリー版 (1932) につけた序文をいっしょに考え合わせなければならない。

The mind of a generation is its speech. A writer makes aspects of that speech enduring by putting them in print. He whittles at the words and phrases of today and makes of them forms to set the mind



of tomorrow's generation. That's history. A writer who writes straight is the architect of history.<sup>⑤</sup>

つまり要約すれば、言葉はある世代の精神で、作家は、その言葉、今日使われている言葉を、大工が材料である木材を扱うように扱って、削り作って、次の世代の精神を定める形式をつくる、これが歴史であり、このような作家は歴史の建築家であると言う。このことは、「U・S・A」の「U・S・Aは、主として、人々の言葉なのだ」という文章を理解するかぎになると考えられる。この「U・S・A」の若者が耳でとらえようとしている言葉、かれと他者をつなぐ言葉は、つまりある世代の精神、ある時代の人々の精神、すなわち、U・S・Aという国のある時代に生きる人々のもっとも中心的なものである精神で、従って、言葉がU・S・Aだ、と言える。U・S・Aはいろんなものでありうるが、主として、世代の精神、すなわち人々の言葉である、ということは、このようにして理解できる。

さらに、「このような作家は歴史の建築家である」、ということから、ドン・パソスは、この三部作 U・S・A.で歴史を、二十世紀の始まりから第一次大戦を経て、サッコ・ヴァンゼッティ処刑後に至る約三十年間の歴史を、書いた

ことになる。そしてそれは、続く世代の精神を定める形式をつくったということになるわけである。この U・S・A.という作品は、つねに、その読者の時代の精神の枠組を提示しているわけで、その上に、どういう歴史を築くかが、読者の課題となる。

もちろん、およそ歴史とはそのようなのだとも言えるわけだが、この U・S・A.では、歴史は、ドス・パソス自身の記憶を通して出てくるもので、その想い出される内容もまったく多種多様、個人の生活上の些細なこともあれば、歴史的な事件もあり、また想い出された方も、記憶のそれに似て脈絡なく、それからそれへと発展する。そして、このごちゃまぜの歴史の中を一貫しているのは、プロローグ「U・S・A」の、そして続いて、「カメラの目」の若者、ドス・パソスの目である。

このように読んでくると、この U・S・A.のプロローグ「U・S・A」は、ひじょうにすぐれた序文であると言うことができる。このプロローグにおける、全身を渴望にたぎらせて歩き続ける孤独な若者は、すなわちドス・パソス自身であり、かれは人々の言葉 U・S・Aを探し求めて歩いている。かれは、どんなに遠くても、人々の言葉が聞かれるあらゆる所へ、急いで行かねばならぬ<sup>⑥</sup>。それは、作

家としての意識的な努力であって、そのような作家は、次の世代のために歴史をつくらうとしているのである。

ドス・パソスのこの目的は、プロローグに続く千四百余頁の三部作で果たされている。「ニューズ・リール」も、「物語」も「小伝」も、いずれもU・S・Aであって、そして、このプロローグ「U・S・A」の若者は、「カメラの目」の中の若者となって、これらの他の部分を見つめ、聞いて、証言している。その証言は、対象をつき離し、主観を排除した冷静なもの(“straight writing”)で、「U・S・A」や「カメラの目」にみられる情熱や、他者とのつながりを求める行動とは対照的である。つまり、ドス・パソスは、注釈抜きで、このU・S・Aの大部分を占める「物語」部分に登場する人物たちが、時間の中を漂い流れていくさまをほとんど冷酷に描く。そこに自然主義者ドス・パソスをみるのがふつうになっているが、忘れてはならないのは、これまでみてきたように、プロローグ「U・S・A」の若者||ドス・パソスの強烈な情熱や意欲である。ドス・パソスの現実認識が、自然主義的なものであるにせよ、あるいはまた、圧倒的に優勢な体制につぶされていく良心的な知識人のそれであるにせよ、それを記録して歴史をつくらうとする、自己の方法を確立した作家の意欲を、

われわれはこのプロローグ「U・S・A」にみるのである。

# 註

① プロローグ“U.S.A.”とエピローグ“Vag”の若者は、いずれも放浪しているわけだが、二人は大いにちがう。“Vag”の若者は“U.S.A.”に続く千四百余頁の経験の後、より疲れ、敗北感が目立つ。かれは頭がふらふらし、空腹で、見すばらしい姿で道路に立って、砂をあびながら次々に疾走してくる車に親指を立てて、百マイル先まで、ヒッチハイクを試みている。もはや自分の足で歩けぬほど疲れて、目的もなく、ただ百マイル先へ行くだけの“vag”である。

② John Dos Passos, *U.S.A.* (New York: The Modern Library, 1938), pp. v-vii.

③ 訳出にあたって、並河亮氏訳(改造社版・1950)と尾上政次氏訳(筑摩書房版・1963)を参考にした。

④ たとえば John H. Wrenn, *John Dos Passos* (New Haven: Twayne, 1961) の第八章、第九章など。

⑤ John Dos Passos, *Three Soldiers* (New York: The Modern Library, 1932), pp. vii-viii.

⑥ 先の *Three Soldiers* の序文の結びで、「生きのびて、今日までに、われわれの時代の大いなる幻影をおおいかくして、たまん幕がはぎとられるのを見てきた者は、今や歴史のなまの構造を扱わねばならぬ、しかもすばやく扱わねばならぬ、それがわれわれを踏みつぶしてしまわぬうちに」(p. ix.) とドス・パソスは言う。このような危機意識が、若者が急がせるのである。(本学専任講師 英文学)